報　道　資　料

令和６年１１月１日（金）
教 職 員 課
小中人事係
　係長　坂　口　宏　仁
県立人事係
　係長　門　司　雅　之
　ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ 0742-27-9844
　（内線）　5241・5247

令和６年度奈良県公立学校優秀教職員表彰について

県内の市町村教育委員会教育長及び県立学校長から推薦のあった「奈良県公立学校優秀教職員表彰候補者」について、外部委員７名で構成する「奈良県公立学校優秀教職員表彰選考委員会」での選考を経て、本年度下記のとおり９件の教職員を「奈良県公立学校優秀教職員」として決定し、教育長が表彰することとしました。

記

１　表彰の目的及び趣旨

この表彰は、教職員の意欲の高揚と、学校の活性化を図ることを目的として、職務に精励し、他の教職員の模範となる教育活動を実践している教職員及び教職員グループを対象として平成１６年度から実施しています。また、県内の学校の活性化に資するため、表彰実践事例を県内の教育関係者に紹介するとともに広く公表しています。

令和２年度から、学校教育における教育実践等に顕著な成果を上げた教職員であって、さらに顕著な成果を上げることが見込まれる者を表彰する「若手教職員等奨励賞」を設けました。

本年度は、第２１回目の表彰になります。

２　令和６年度表彰の概要

(1) 被表彰者数　・・・・・・　９件

(2) 被表彰者　・・・・・・

奈良市立朱雀小学校	中村　友哉
生駒市立生駒南小学校	武村　篤人
葛城市立忍海小学校	上嶋　崇
河合町立河合第二小学校	新田　浩司
奈良市立三笠中学校	守山　雅史
奈良市立若草中学校	新谷　太一
奈良県立奈良商工高等学校	吉竹　裕章
奈良県立ろう学校	山本　明子

【若手教職員等奨励賞】

天理市立朝和小学校	田端　浩多

(3) 表彰式　・・・・・・なし

３　具体的な表彰実践事例（代表４例）

(1) ESD と NIE の取組を通じて学び続ける学校をめざした小学校の事例

ESD では、子どもたちが生きる少し先の未来社会をたくましく生き抜く力を育てるために、「価値観の変容」と「行動化」を大切に、授業実践に取り組んでいる。ESD での学びは日常生活や社会的責任に結びつける狙いがあり、見通しの立てにくいこれからの社会を生き抜く児童にとって、必ず力になるとの確固たる信念の下、長年取り組み続けている。

NIE では、情報化社会の進展、国際化の加速、社会の変化の激化など、様々な変化に対応するため、教育課題への取組を進めてきた。昨年までの３年間、学校全体としての取組の推進に中心となって取り組んでいる。

(2) 多角的な視点から見る生徒指導における組織づくりをめざした中学校の事例

生徒指導事象を校内で共有し、対応などについて協議する生徒指導部会を毎週１回（令和６年度は火曜日２限）設定している。この生徒指導部会では、本教諭が生徒指導主事となった令和２年度より、管理職・生徒指導主事・各学年の生徒指導担当教員・生徒支援部長・養護教諭・人権担当教員・教育相談担当教員に加えて通級指導教室担当教員・特別支援コーディネーターの計 12 名で行っている。このような組織づくりは、生徒指導事象を起こした生徒への生徒理解とその生徒の背景の理解をすることで、課題予防的生徒指導と発達支持的生徒指導を行っていくことを目的の１つとしている。

また、生徒指導部の担当教員だけでなく、それぞれの分掌や専門的な教員がはいることで多角的な視点から見た当該生徒へのアプローチが期待でき、これにより特定の教員が抱え込むことなく、多くの教員がかかわって指導や今後の方針などを考えることでチーム学校としての対応が行われており、学年や分掌を超えたかかわりや方策をたてることができた。

(3) ロボットプログラミングの指導による生徒の育成と地域貢献についての高等学校の事例

厚生労働省および中央職業能力開発協会主催の全国大会「若年者ものづくり競技大会」の「ロボットソフト組込み」職種に毎年出場している。全国大会において生徒たちを令和元年度と令和３年度には全国優勝へ導いた他、例年上位入賞を果たしている。また、そこで得た知見を活かしながら、地元奈良市での催しや中学校への出前授業として生徒たちがプログラミング教室で講師を務めている。

このような経験を通してグローバルな視点をもってコミュニティーを支えることができる地域のリーダー的存在になる生徒を育成している。高校卒業後の生徒は、さらに高度なプログラミング等の情報分野を学ぶために大学に進学する者が多い。大学卒業後は Society5.0 の実現に向けて社会をけん引するような企業に就職するなど、社会貢献の一躍を担っている。

(4) 自分を見つめ、他者を受け入れる心を育てる教室づくりをめざした小学校の事例（若手教職員等奨励賞）

JICA 関西が主催する JICA 国際協力出前授業にて、エジプトの小学生とオンライン上で、「異文化理解」をねらいとした全５回の授業実践を行った。馴染みのない食事や異なる宗教に対しても、理解しようと努める姿勢が見られた。また、日本の文化や良さ、生活の様子についても、英語やジェスチャーで伝えようとしていた。この実践の様子は、産経新聞・奈良新聞にも取り上げられ、子どもたちにも大きな刺激になった。

日々の実践の中で、コーチング的手法やアドラー心理学をもとにした子どもたちとの関わりや、子どもたちへの声かけをすることで、子どもたちが「自ら考え生み出す力」を引き出し、子どもたちの「本当はこうなりたい」という願いを叶えられるよう取組を続けている。